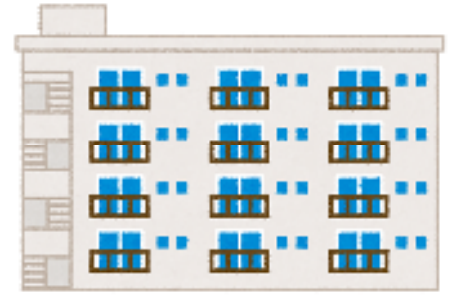


平成29年10月25日、政策秘書課職員との話です。

長久手市はニュータウンと同じ

1960年代、春日井市の高蔵寺ニュータウン、東京の多摩ニュータウンを始めとして、日本全国で団地が作られました。団地での暮らしは、「家付き、カー付き、ババア抜き、3食昼寝付き」ともてはやされ、田舎のわずらわしい人間関係から抜け出したい人達の憧れの生活でした。



同じ年代の方々が住み、同じ時期に子どもが生まれ、にぎわいがありました。しかし、一斉に同じ年代が入居したことにより、一斉に高齢化が始まりました。子ども達は、進学や独立に伴い、ニュータウンを離れていきました。ご近所とのわずらわしい関係も避けてきたニュータウンは、子ども達の「ふるさと」には、なり得ませんでした。

長久手市も、ニュータウンと同じです。

1970年代はじめ、藤が丘に近い市西部から土地区画整理事業が始まり、高速道路より南側での土地区画整理事業まで、一気に宅地開発が進みました。何もなかったところに家が建ち、長久手に引っ越せば、隣近所とあいさつをしなくても、便利で快適な暮らしができる、つながりが希薄なまちになってしまいました。

今、最初に土地区画整理事業が行われた西小学校区内は、進学や独立で、子ども達が出て行き、大きな家に老夫婦2人だけとか、その家を壊して、1軒だった土地に2軒分の建売住宅が建設されるような光景を目にします。今は、若い世代で溢れている市が洞小学校区でも、数十年後には、西小学校区と同じことが起きるでしょう。

一方で、市の東部、イケアができた付近は、小牧・長久手の戦いの頃の世帯数は160世帯、明治の初めは300世帯、現在でも600世帯くらいです。「念仏講」が残り、昔ながらの近所付き合いが続いています。地元の区長さんに伺うと、地区外から引っ越してきたお嫁さんやお婿さんも、増えてきたそうですが、多くが2世代、3世代でお住まいであり、言ってみれば「わずらわしい」昔からのご近所付き合いは、祖父母世代、親世代からちゃんと引き継がれているそうです。そうしたお付き合いの残る地区は、災害時でも隣近所での助け合いができるはずです。

全国のニュータウンが、わずらわしい暮らしを避けて、壊れました。長久手市も、今のままでは、ニュータウンと同様に壊れるのが目に見えているのに、同じ道をただ漫然と進んで良いのかと私は思います。

～市長の話を聞いて～

私の中では、「ニュータウン＝団地」というイメージがあり、市長が、「長久手もニュータウンと同じだ」と言われたときは、最初はピンときませんでした。

しかし、市長と話しているうちに、核家族が多く住んでいる、成長した子どもたちは出て行ってしまう、一斉に開発され、一斉に同じ年代が住み、一斉に高齢化していくと言う共通点に気付き、長久手もニュータウンと一緒に納得しました。

最近、「1人の100歩より、100人の1歩」という言葉を耳にしました。

30年後も50年後も住み続けたいと思う長久手市にするために、私達一人ひとりが、あいさつ、声掛けという、その1歩からを踏み出すことを今、始めませんか？